

森の寄席 ~ 東西落語交流会

2005. 7. 24

会場 パルト 杉並区阿佐ヶ谷南 2-21-9

東：入船亭扇好・春風亭朝也 西：桂福楽・露の団六

飛び入り漫才コンビ：5番6番



第7巻第7号
通巻第79号



私は思う。東京に十年近くも居て、なぜこんなに可笑しな人達がいることに気が付かなかったのか。心の底から笑ったのは久々だった。昼の三時に開演したのだが、あつという間に十時になっていった。これほど時間が早く過ぎるとは思いませんでした。

森の寄席は、扇好師匠が主催している東西落語交流会だそう、今回で五回目だそう。集まった人数は二十数名、二十平米程度の小さなバーに程よい活気が出ていた。私はこれが初めての寄席で、どんなものなのかと期待に胸を膨らませていた。気を鎮めようとビールをちびちび飲むのだが、逆に気が立ち、早く始まらないかとソワソワし始め、自然と指先が動きだし、あたりをきよるきよると見回す始末である。

突然チリンチリンとドアの鈴が鳴ったかと思うと、三尺四方程の高座にちよこんと座つたのは前座の春風亭

(二面に続く)

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

- 一・二・三画からすライブラリー
- 落語『森の寄席』
- 映画『スター・ウォーズ』
- CD『BAX』
- 三画(語面)
- シビライズ・イット
- 四面 (ロンドンレポート)
- その雲の上に

結局のところ、生まれてくる時は独りぼつち、死ぬ時も独りぼつちである。双子が産まれてくる時はどうなんだよ、あるいは、アメリカ軍の空爆でどかんと一網打尽になってしまふ場合はどうなのか、という意見なんぞもあるけれども、一つ一つの生、一つ一つの死は独立しているのだし、そういう意味ではどうしたってこうしたって独りなのである。人間の生と死、つまり、人生の入り口はどちらにも、この世の側から見ると限りにおいては個人個人に個別のものなのである。あの世の世界ではどうなっているのかということは私には判らない。いや、そもそも、あの世というものがあるのやらないのやら。

日では、川の水を飲むと汚染されている危険があり、木の実を齧ると所有者から窃盗犯として訴えられたりしかねない。雨風だけは凌げるという程度の荒家を建てるだけでも、不法占拠者としてお縄を頂戴する破目になるだろう。ははは、ただ自然の中で静かに暮らすうってだけでパクられちゃうってんだから、笑えるね。いやいや、笑えない、笑えない。兎にも角にも、このような社会においては、人てえものは衣食住を何とかしようとするれば金銭を以てするしかなく、金子を手に入れるには何らかの労働を支払うしかなく……って、書いてきて、本当にうんざりするけれども、まあ、しょうがない。そんな具合にして、みんな生きてるのでござんしょう。

「生きる」という大きな括りでは無理な話であるけれど、小さな部分に限定すれば、独りだけで行つ自由というのはたくさんある。ああ、漸く話がここまで辿り着いた。

次のライブがじわじわと近づいてきて、今、曲を書いたり、アレンジしたり、譜面を書いたり、というようなことをしている。これは独りでできますな。また、今この瞬間

(最終面に続く)

からす新聞は××××が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。
誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

(一面から続く)

朝也。いよいよ嘸が始まる、と思わず息を飲んでジツと見つめてしまふ。見つめ過ぎたためか、少し肩が凝ってきたようだ。いや、どうも理由はそれだけじゃあなさそう。初寄席のくせにこんなことを言っちゃあ気が引けちゃうが、この方は少しばかり早口でいけねえ。なんだか、こっちまでせつつかれてる気にならあ。そう思っていると、次からの御三方は落ち着いたテンポで安心して聞かせてくれらあ。これが芸の差なのかねえ。世間話から始まり、スツと客を引き寄せる。するつてえと、いつの間にやら本題に入ってるつてな具合だ。これが、落語つてやつかと思心しちまった。

それにしても、人柄が滲み出ているためか、それぞれに味わいがあるから面白い。朝也さんは若手らしい懸命さが伝わってくる。自分なりに嘸をアレンジしているところも見受けられ、好感の持てる方だ。扇好師匠は嘸をじっくり聞かせてくれる。人情と笑いがじわじわと身体に浸透してくるような話し方だ。間を置くためか、時折少し鼻を触るのだが、そんな仕種も粋で好い。団六師匠は笑い顔に愛嬌がある。もちろん嘸自体は可笑しいのだが、師匠がにま〜と笑つと、ますますこちらの顔が弛んでしまふ。福楽師匠は、大きな声や動きで客をどつと沸かせるが、同時に細かい芸も秀逸で、茶を啜り、旨そうに羊羹を食するところは、本当らしく見えて涎がでてきた。今回は飛び入りで漫才コンビ5番6番も参加していた。大先輩達を目の前にして、始終緊張しているようだったが、漫才になると一転し、堂々とした態度で、喋りも上手く、少しばかりファンになってしまった。

嘸だけで終わらないのが小さな寄席の好いところ。最後に師匠達と客との懇親会が開かれた。それぞれに、手探りながらも徐々に打ち解け始め、いつの間にか、気軽に話ができる心地良い雰囲気になっていた。客が全くいないときの寄席の話やら、失敗ばかりする芸人達の笑い話やら、思いもなかったような話の連続である。お酒の席での嘸家も、やっぱり話上手であることがよくわかった。

(高橋)

「Star Wars Episode III Revenge of the Sith」

「スター・ウォーズ エピソード3 シスの復讐」

監督・脚本：ジョージ・ルーカス

音楽：ジョン・ウィリアムズ

出演：ユアン・マクレガー、ナタリー・ポートマン、ハイデン・クリステンセン

配給：東宝

製作：2005年 米国・FOX



Lb films



やはり話題のこれは観ておかなばならぬか。しかし、世代が違うとスター・ウォーズ自体に関心が無いという事実も露になったので復習してみよう。

宣伝では何度も言われているが、ジョージ・ルーカスのライフワークとも言える28年間に及ぶシリーズの完結編。筆者が10才になるかどうかの頃、今では当たり前になったSFX最初の作品がこれの第一作。その名も「スター・ウォーズ」が77年、その3年後に「スター・ウォーズ 帝国の逆襲」、さらに3年後の「スター・ウォーズ ジェダイの復讐(帰還)」となる。今ではこれら3部作をそれぞれ、エピソード4、エピソード5、エピソード6というように名称が変わってしまったが、。そして99年の「スター・ウォーズ エピソード1 フォントム・メナス」、02年「スター・ウォーズ エピソード2 クローンの攻撃」まで5作製作されて、最後を埋めるのが今作品となる。何故、今で言うエピソード4から作つたかという点、当時はSFX自体が海のものとも山のものとも解らなかつた時代であり、巨額の製作費をかける為、シリーズの中から興行的に一番受けそうな所から映画化したと言われている。もちろん興行的には大成功したので、その後3作が続けて製作されども成功を納めた。しかし、原作者であるルーカスは最初の話から映画化したいと当時から発言しており、28年かけて実現した事になる。

さて、本題の今作品だが、やはりシリーズの最後というのは、どうしても謎解きの要素が多く入ってくる。ダース・ベイダーの鎧は何故必要か。暗黒面の皇帝は誰なのか。そもそも何故戦争になっているのか、帝国軍に対して、反乱軍なのは、まあ、それほど複雑な要素は無いので見逃したシリーズが無ければ大体把握出来るはず。筆者も結局は全ての作品を劇場で観た事になる。ここまでは来て観て当然という気までしてくるから不思議だ。

実は、これを観る前日に制作順で全5作品をいつきに観た。やはり技術が格段に進歩している事が良く解る。特に宇宙での戦闘シーン等は一言で言つて美しい。それだけでも観る価値はあるというものだ。

万が一、まだひとつも観てないという奇特な人が居たら、それこそ今作品も含め、エピソード1から順番にエピソード6まで観てみるのも面白いのではないだろうか。

因に、このシリーズはエピソード9まであると言われている。残りのエピソード7から9まではテレビドラマシリーズとして制作するという噂もあるようだ。さらに、アニメにもするんだとき。

(小張寅僧)

シビライズ CIVILISE it! 教えてやれ!

ロンドンで最初のテロがあった直後、サミット会場からのブレア首相の第一声は、こんなフレーズで締めくくられていた。

Whatever they do, it is our determination that they will never succeed in destroying what we hold dear in this country and in other civilised nations throughout the world.

彼らが何をしようと、我々には決意がある。彼らは決して、我々がこの国や他の世界中の文明国において大切にしているものを壊すことに成功はしないのだ。

この中の civilised [米 civilized] とりあえず「文明化した」と訳したが、欧米人が、特に政治家なんかがこの言葉を使うのが、私はなんか気に食わない。

詳しく意味を見てみよう。英和辞典にはだいたいこんなふうに記載している。(イギリス圏を除き、日本を含む世界一般では civilize で通用しているので、以下、表記はこっちにします)

civilized

【形容詞】文明化した、礼儀正しい、教養の高い

The British are civilized people.

「イギリス人たちは礼儀正しい人々だ」

civilize

【他動詞】～を文明化する、教化する、開化する、洗練する

They tried to civilize the hooligans.

「彼らはフーリガンたちをまともな人間にしようとした」

さらに詳しい説明を、毎度おなじみ英語のバイブル、オックスフォード英語辞典(OED)に求めれば、

to bring out of a state of barbarism, to instruct in the arts of life, and thus elevate in the scale of humanity; to enlighten, refine, and polish.

未開の状態から目を覚まさせ、生活の技術を教え、そうすることで人間性を持つ段階まで引き上げてやること。啓蒙し、不純物を除き、そして磨くこと。

傲慢の臭いがプンプンする。西洋文明が世界を席卷してきたことを否定はしないが、何か偉そうだ。使う本人たちがそれを意識しているかって言うと、多くの場合そうではないだろう。ブレア首相にしたって、civilised nations を「われわれによって文明化された国々」のつもりで言っているわけでは、多分ない。それでも気に入らないものは気に入らない。

たとえば中国が北京オリンピック開催を一度逃した時。彼らは資格がないと(公式にはないが)言われたのであった。

China is not civilized enough to hold the Olympic Games.
「中国はオリンピックを開く資格がない」

槍玉が上がったのは、文明国には存在してはならない人権抑圧の問題。確かに中国の人権問題も困ったもんだとは思っていたが、それ以上に civilised って言われると、ケツて感じ。日本人など話にならないぐらい西洋への対抗意識の強い中国人は、中指立ててただろう。とはいえ、開催決定後も暴徒観衆問題でやっぱり「civilised 度」を問われてますけども。

もっとも、最近いよいよ文明化し出した中国人たちは、皮肉を込めてこんなこと言うのかも知れない。

Japan is not civilized enough to settle the past.
「日本にはまだ過去を清算する能力がない」

それだけの教養がないと、まだ教わってないと、いうわけですね。そらそうかもしれないが、あんたらが civilize 言うなよ。思っていたら、実はアメリカ人がイギリス人の受け売りだったなんて話、すごくありそうだ。(望月)

バックスの作った音楽には、きっぱりとしたスタンスがない。現代のようでありながら近代のよう。民族っぽかったり印象派っぽかったり。これを多様性と見るか没個性と見るか。ま、多様というほど多様じゃないな。そして、歴史に埋没してしまった。私だって、そんな人、どこかで聞いたことがあるね、というぐらいの認識でしかなかった。ナクソスから、例によって、気軽な価格で次々にアルバムが発売されなければ、生涯聴かずに終わったかもしれない。で、どうなのか、というと、これがなかなか。バックス命、バックス最高、とは言えないが、この手触りは悪くないねえ。ついつい「x 的な」と形容したくなるどころが、多々あるものの……この音楽はフランスじゃないしロシアって訳でもないし……って、結局、どこまでももやもやしたイメージなのである。突出した何かはここにはない。けれども、夏の夜を涼やかに過ごす友としては御機嫌だ。もう一周聴こうかな。

(全太)

BAX: Piano Sonatas Nos. 3 and 4

Ashley Wass

Naxos, 2005年、8.557592



London Report

その雲の上

その日は天気予報では午後から雨だったはずが、しっかりといい天気だった。何となく冷たいトマトが食べたいような陽気。そこで昼間からずっと、身体を動かしたい気分だったので夜にジムに行く事に。適度に運動をして、シャワーを浴び「さて家に帰るか」とジムを出ようとする、いつの間にか外は土砂降り。出口の向こう側は、大粒の雨が「これでもか」と至る所に降り注ぐ。バケツをひっくり返したような、とはこの事を言うのだろう。向こうの空では雷が光っている。

入り口には傘を持ってきていなく、帰るにも帰れない人達が、家族に電話をしたりしながら溜まっていた。ことう光景は外国も日本も一緒なんだな、と僕は突然雨が降り出した日に駅で見る光景を思い出して。偶然にも僕は傘を持っていたのだけれども、少なくとも足元はびしょ濡れになってしまうので、軽い優越感を感じながらその場で雨が止むのを少しの間待ってみた。五分ぐらい経っただろうか、それでも雨は一向に弱くなる気配を

見せなかったもので、少し躊躇した後で、やっぱり傘を開いて雨の中に飛び込んだ。まさにそれは降られているというよりも、雨と言つ物質の中に入ってしまったような感覚。子供のころ、台風や地震の時に感じた軽い興奮が僕を襲う。傘に当たる沢山の雨粒の音が何だか嬉しい。考えてみれば、こんな土砂降りの中を歩くのは随分久しぶりだ。すれ違う人々は文字通りずぶ濡れで、かえって気持ち良さそうな顔で走って行く人や、少しでも雨に濡れないように、風のように駆け抜けて行く人、傘の細い柄の部分にしがみつくようにして歩く人など様々で面白い。すると突然、辺り一面が昼間のよう明るくなったと思つたら、

パーン!

と物凄い音がして、雷が鳴った。

「おう、雷様がやって来たな」

(神山)

(一面から続く)

れど、私としては他人と同居する際には常に猛烈に譲歩しているのであります。

も、それはそれで善し。

の、原稿を書くという行為も独りでできる。私は世間様とは関係なく、こんな風に独りで勝手に何かしているのが大変好きなのであり、これらの行為を大いに楽しんでる次第。しかし、ここから一歩踏み出すとなると、つまり、音楽であればスタジオに入ってメンバーと練習するとかライブでお客さんの前で演奏するとか、からすの原稿であれば校正したり編集したり印刷したりPDF化した身勝手三昧では成り立たなくなる。それで、私は、私の中の別の一面を表に出してですな、他人様の意見を、ははあ、さいでげすか、と拝聴したり、よっ、旦那、憎いね、なんて具合に太鼓を持つたりして、どうにかこうにかお付き合いを仰ぐ次第なのである。他の人の目にはそうは映らないかもしれないけ

れど、私としては他人と同居する際には常に猛烈に譲歩して... 共同作業も悪いことばかりではない。世の中には六十億だか何だかという途轍もなく多く人間がいるぞうだ。当然、中には善くも悪くも全く理解不能な不可思議な人だつてたくさんいるぞう。必ずしも、奇人変人とはかり出会うべしという必要はなかつたけれど、考えてみれば、他者というものは程度の差こそ小さかつたとしても、自分の基準からすれば全員奇人変人である筈だ。自己の基準とは異なる他者の意見や感性に触れたつて悪かない。他者と接したけれど、やはり、独りきりでやってきた方法が正しかったというのなら、それはそれで善し。自分とは異なる何ものかの影響を受けるなら、それもそれで善し。取り敢えず一緒に呑んでみた、というだけで

「人間はポリシ的動物(zoon politikon)である」と言つたのはアリストテレス。ポリシ的動物とは、つまり、国家的、あるいは、政治的、社会的動物だということか。それから、かれこれ二千数百年が経過したけれど、人心も、人心がそこで育まれる社会といつものも、あまり変わっていないような、大きく変わってしまったような... どちらの物語いも間違ではないけれど、兎にも角にも、私は今日を生き、明日も生きる。おいらも頑張るから、君らも適当に休みながらも程々に頑張りたまえよ、と、独り言のようなことをぼつり、のお粗末。

(全大)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice : +81-3-3220-0644
 Facsimile : +81-3-3220-0640;
 e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
 篠崎健一アトリエ

編集後記
 からす新聞第七巻七号(通巻第七十九号)、無事、発行できました。
 新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
 次号発行予定日は二〇〇五年八月二五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

アリス

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

宝仙寺
ファミマ
おうめかいどう
中野坂上駅

アリス